



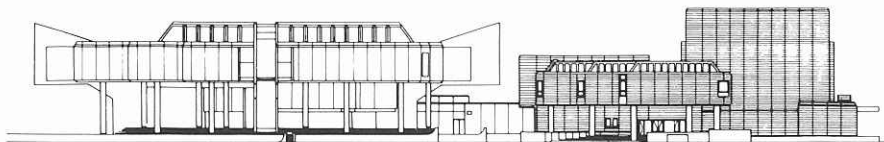
騎馬武者像 (重要文化財) 室町時代

# 佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM · SAGA PREFECTURAL ART MUSEUM

17 January 1995

No. 108



**企画展案内** 戦国を駆ける武将たち —五州の太守 龍造寺隆信の時代—

会期：2月3日(金)～3月12日(日)

戦国時代、いかにも無秩序に吹き荒れる領土侵略と下剋上の嵐の中で、各地の戦国大名たちは一体、なにを思い、なにを目指して絶え間ない争乱を生き抜いていたのだろうか。彼らは、一体どのような社会の到来を頭の中に描いていたのだろう。

本展覧会は、激動の時代を風のように駆け抜けた戦国大名の姿に想いを馳せ、歴史の一時期の創造者となった彼らの英姿をよみがえらせようと企画しました。

本展覧会のサブ・テーマである龍造寺隆信は、享祿2（1529）年に水ヶ江館（現在の佐賀市中の館）で生まれ、一代で北部九州にその勢力をひろげ、「五州の太守」（九州北部の五つの国 肥前・肥後・筑前・筑後・豊前の支配者という意味）とうたわれ、その武勇をとどろかせたが、天正12（1584）年の島原の沖田畷の戦で、島津氏・有馬氏の連合軍に敗れ、五十五年余の生涯を終えた。

龍造寺隆信が勇躍し、その名を馳せた時代は、室町幕府の支配力の低下に伴い、全国各地に戦国大名と呼ばれた群雄が割拠し、それぞれが新たな天下の統一者をめざして熾烈な争いをくりひろげた時代だった。また、鉄砲やキリスト教など西洋の文化がはじめて日本に到来し、それが様々な形で日本の社会全体に大きな影響を及ぼすようになった時代でもあった。

**I プロローグ 西洋文化との出会い**

天文12（1543）年、一艘のポルトガル船が九州の南海種子島に漂着した。これは、西洋人と日本人とがはじめて出会った画期的な出来事であったが、それ以上に、その時ポルトガル人たちが手に携えていた鉄砲は、当時の「戦国」という日本の時代的な要求とも相俟って瞬く間に全国に拡がっていくことになったという点で、歴史的に重要な出来事として位置付けることができる。

さらに、天文18（1549）年、フランシスコ・ザビエルによってキリスト教が伝えられると、西洋

諸国との貿易の利を求め、領国内での布教を許可したり、自らキリスト教に改宗する戦国大名もあらわれ、日本人の文化の中に、さまざまな面でキリスト教的な文化の影響が見られるようになった。

**II 群雄割拠の英雄たち**

応仁元（1467）年に起こった応仁の乱後、室町幕府の権力基盤をなしていた守護大名は、領国の支配権を家代であった守護代（守護の代官）や国人・土豪層（土着の侍たち）に奪われて相次いで没落し、各地に新たな勢力が台頭した。それが戦国大名である。

戦国大名は、つねに自らの実力で築き上げた領国において、富国強兵や家臣団の統制を図りながら、領国の拡大に努めた。彼らには、また、弱体化した室町幕府に代わる新政権の樹立を自らの手でなし遂げたいとする野望があり、それが戦国大名相互の熾烈な闘争の中で、さまざまなドラマを生み出すこととなった。

**III 龍造寺隆信と九州**

戦国時代の九州は、周防山口を中心に絶大な勢力を保っていた大内氏が、十六世紀の半ばに滅ぼされて、その勢力が九州から後退すると、肥前国を拠点に少弐氏の配下の武将から成長した龍造寺氏と、鎌倉時代以来の守護勢力より成長を遂げた豊後国の大友氏や薩摩国の島津氏が三者鼎立の形で九州の覇権を争うこととなった。

天下統一の前段階として、九州という地域の中での主導権を得るための熾烈な覇権争いは、天正15（1587）年に豊臣秀吉が九州を平定するまで繰り返された。

**IV 天下人の時代**

「天下人」とは、天下の政権を掌握した者をいう。その呼称は、政治的にも経済的にも、あるいは文化的にも天下を統一することを意味する言葉である。戦国期に活躍した武将たちはいずれもが大なり小なり天下人となるべき野望を有していた。

織田信長が本能寺に倒れたあとを継ぎ、群雄割拠の戦国の世に終止符を打ったのは豊臣秀吉だった。

#### V 戦国の終焉 島原の乱と鎖国

豊臣秀吉の死後、天下分け目の関ヶ原の合戦を制した徳川家康により江戸幕府が開かれた。

元和元（1645）年、大坂夏の陣で豊臣秀頼を滅ぼしたことで、江戸幕府の覇権は名実ともに確立し、「元和偃武」（元和年間になり武器をおさめて用いなくなったこと）と呼ばれる時代が到来した。

しかし、こののち寛永14（1637）年には、九州の島原・天草のキリスト教徒らを中心とした大規模な農民一揆が発生し、江戸幕府に大変な衝撃を与えることとなった。12万余もの大兵力を動員してようやく鎮圧したこの島原の乱以後、国内での大乱には実質的な終止符が打たれ、勇者たちの時代は終わりを告げたと言える。

そしてまた、この事件は、日本に200年余の長い太平の眠りをもたらす鎖国の時代のはじまりをもたらした事件であった。

この事件以後、江戸幕府はキリスト教に対する禁教政策と西洋諸国との貿易統制をいっそう強化し、寛永16（1639）年にはポルトガル船の日本への来航を禁止する鎖国令によって鎖国が完成、寛永18（1641）年には平戸のオランダ商館を出島に移して、長崎は西洋に開かれた唯一の日本の窓口

となった。

#### 戦国という時代をふりかえって

一般に、戦国時代というのは応仁元（1467）年に起こった応仁の乱から、織田信長が将軍足利義昭を奉じて上洛した永禄11（1568）年までの群雄割拠の動乱期をさして言う。しかし、実際には、その後も各地で有力武将同士の覇権争いは相変わらず続き、とくに九州では、その時期以降、肥前の龍造寺氏・豊後の大友氏・薩摩の島津氏の間での激しい主導権争いが繰り返され、豊臣秀吉の天下統一ののちも、戦いの舞台はさらに海を越えて朝鮮半島にまで飛び火していく。

本展覧会は、日本歴史のなかで、中世から近世への狭間の動乱の時代として、古い権力機構から新たな権力機構への再編成の時代として、そしてまた、西洋文明との出会いから別れへの時代として、戦国時代をとらえることとし、島原の乱による本格的戦国の終了と江戸幕府の鎖国もふくめた新たな全国支配体制の確立を戦国時代の終章に位置づけることにした。このような視点から、あるいはまた、戦国武将列伝として、展覧会「戦国を駆ける武将たち」をお楽しみ下さい。

（学芸員 川副義敦）



孫子の旗・室町時代



三宝兜神形張懸兜・室町時代



鉄黒漆五枚胴具足・桃山時代

## 常設展案内

## 日本近代洋画と白馬会

白馬会第1回展は1896年(明治29)10月7日から11月29日まで、上野公園旧博覧会跡第5号館で開催された。出品点数209点。1910年(明治43)の第13回展までで解散した。

白馬会創立のいきさつについて以下に略述する。

## 1896年(明治29)5月3日(日)

久米桂一郎の母の葬儀の帰途、黒田清輝、合田清、佐野昭、小代为重、菊池鍬太郎、吉岡芳陵らとともに山本芳翠宅に集まり、「夕方から皆で出掛け聖坂上の焼酎屋と云どぶろく屋二這つて飲んだり食たり」(『黒田清輝日記』中央公論美術出版1967年)した折に「自由倶楽部」設立の議が成り立った。こうした事情について小代は、「名称は…(中略)…白馬(ドブクロ)會と決つたのである。當時はまだ北蓮藏や中澤弘光は若くて議論ももつてゐず、参加はしなかつた。」(『肥前協會』第6号1938年)と語っている。

## 5月22日(金)

黒田、久米、山本正太郎の3人で山本芳翠を訪れ「明治美術會から出て新二つ俱樂部をたて、展覽會をやろうと云相談を極めた。」(『黒田清輝日記』)

## 6月6日(土)

白馬会の発会式が根津の神泉亭で開かれた。黒田、久米、山本、小代、合田、佐野、菊池ほか松岡寿、長沼守敬ら42名が出席した。

## 9月10日(木)

黒田清輝、久米桂一郎、合田清、小代为重の連名で明治美術會へ退会届を提出した。

## 9月30日(水)

芝浦大野屋で白馬会員の寄合が催され、20名程が集まった。

10月2日以降、白馬会員で手分けをして、展覽會場の設営、作品の飾付けなどの準備が展覽會前日の6日夕方までつづく。

上に引用した「黒田清輝日記」の中で、黒田の僚友たちが頻繁に登場する。なかでも久米桂一郎、小代为重らの登場は間断なくといった様子である。

ここでは、比較的知られていない小代について、

会期：2月11日(土)～3月26日(日)

とくに黒田との交遊がしられる2点の作品を中心に紹介したい。

**小代为重**(1861～1951)は文久元年11月11日佐賀城下(赤松町21番地)に生まれる。明治美術會、白馬会の創設に参加。工科大学、千葉師範学校、東京郵便電信学校、青山学院中等部、女学院で教鞭をとる。略歴については「久米桂一郎と白馬会の友たち展」図録(1987年、久米美術館)、及び「近代洋画の歩み-佐賀の洋画家たち-展」図録(1989年、佐賀県立美術館/佐賀新聞社)を参照されたし。

**小代为重《少女像》(33.4×24.2)**

画面左下に「房州海岸にて小代为重」という書入れがあるものの制作年は明記されていない。しかし、『黒田清輝日記』の明治29年12月26日から翌30年1月10日にかけての「房総旅行記」中の記事が、本作品の制作にかかわる事柄とおもわれる。黒田、久米と小代は明治30年の正月を房総でむかえる。1月6日、7日、黒田と小代は親方分の家で「よめを手本」にかいた(『黒田清輝日記』)。本作品はこのときに制作されたのであろう。また、この房総旅行において、黒田は久米の肖像(久米美術館蔵)もえがいている。

**黒田清輝《小代为重像》(25.3×18.0)**

画面右下に「明治三十年六月六日箱根/湯本萬翠樓ニテ寫ス/黒田清輝」とある。湯本萬翠樓は、明治34年8月7日の日記中の文言「例の萬翠樓福住の三階に泊る 此家の風呂はいつもながら清潔にして心地よい」にみえるように、黒田がしばしば利用した宿所であったようだ。本作品が小代の残された唯一の肖像画である。

(企画普及係長 松本誠一)



## 資料紹介

## 武雄市・貴明寺 後藤貴明像

本像は武雄市史などに紹介され、その存在ははやくから知られていたものの、学術的な調査・研究はなされていなかった。本館では平成4年度より4ヶ年の計画で県内社寺調査（国庫補助事業）を実施しており、その一環として平成5年8月に本像の調査を行った。本像は肥前の戦国武將後藤貴明の姿を伝える唯一の像であり、墨書銘から制作年と仏師が明かであることから彫刻史の上からも重要な資料と考えられる。よって以下にその概要を紹介したい。

## 1. 構造・技法と表現

本像は寄木造、玉眼、彩色で像高は65.8センチ。頭部を桐、体部を樟材でつくり、内削りをほどこしている。彩色は近年の後補であるが肉身部、装束ともに胡粉で白く塗っている。

構造では、頭、体を別の材質でつくることや、内削りの際に腰のあたりを柵状に削り残す技法が特徴的である。(注1)

その表現は、背筋を伸ばし、口を引き締めた謹厳な顔立ちであるが、懐はひろくつくりられている。威儀を正した中に余裕のある姿をあらわしているように思えるが、彫技は優れているとはいえ、彫り口は直線的で抑揚に乏しい。彫刻用材として九州に多い樟が用いられることや、構造上の個人的な技法、あるいは後述する制作の事情をあわせて考えると、当地在住の仏師により制作された可能性が高い。

## 2. 銘文

本像の背中中央と体内背面下部に墨書銘がある。(写真参照) それによれば、像主は武雄の戦国武將後藤貴明、制作されたのは没後5年の天正十六年(1583)である。次良左衛門がみた夢のお告げにより、貴明の子家均と後室宗雪を願主とし、仏師感定軒により制作され、光明寺に安置されたことが記されている。(のち貴明寺に移座)

次良左衛門について知るところはないが、家均

は後述することく貴明の実子晴明のことであり、後室宗雪はその生母。仏師感定軒については、作品、史料ともに未だ確認されていない。

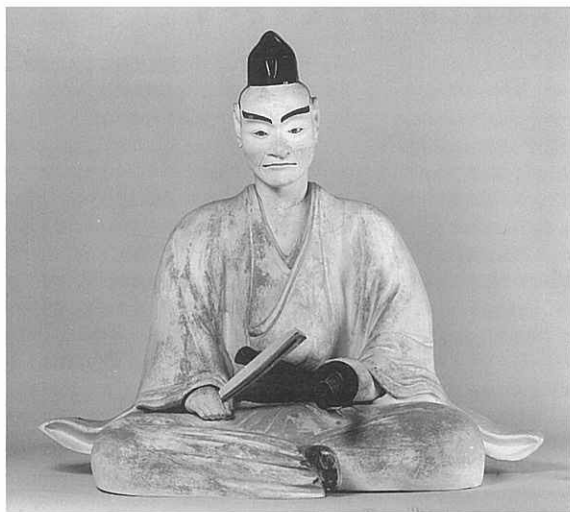
## 3. 後藤貴明

後藤氏は平安時代以来、武雄に勢力を張った豪族で、鎌倉時代には現在の武雄周辺にあたる塚崎莊の地頭職を相伝したと考えられている。承安2年(1172)年の銘のある北方町歎喜寺の銅造業師如来立像に発願者として藤原(後藤)宗明の名があることが知られている。(注2)

後藤貴明に関しては武雄市史(注3)に詳しく、以下それに従って述べてみたい。貴明は大村純前の二男として天文三年三月(1534)に生まれるが、大村氏が有馬氏より養子純忠を迎えたため後藤氏の養子となり家督を継いだ。名は又八郎、一時は佐純とも称した。伯耆守。法名は貴明寺殿天睡自運居士。天正十一年八月二日卒(1583)。享年50歳。墓はもと館の自運山光明寺に現存。

貴明は平戸松浦氏や鶴田氏と結び、大村・有馬のキリシタン大名連合軍や龍造寺氏と戦った。一時は西は佐世保、南は波佐見、川棚、彼杵まで勢力を伸ばすが、松浦氏から迎えた養子惟明と実子晴明との家督争いなどにより疲弊し、龍造寺氏の傘下となって龍造寺隆信の三男家信に家督を譲ることとなり、実子晴明は隆信の弟長信の養子となり、名を家均と改めた。

五州二島の太守とうたわれた龍造寺隆信の陰に隠れてはいるが、肥前の戦国時代を考える上で貴明は忘れることのできない存在である。しかしながら、前に述べたとおり貴明は龍造寺隆信に屈したため、その実像を窺わせるような資料はほとんど残されていない。そのような状況の中、没後まもなく実子と室を願主としてつくられた本像は貴明の真の姿を写していると考えられ、また仏師感定軒の名を記し、制作年の明かな肖像彫刻としても貴重である。(学芸員 竹下正博)



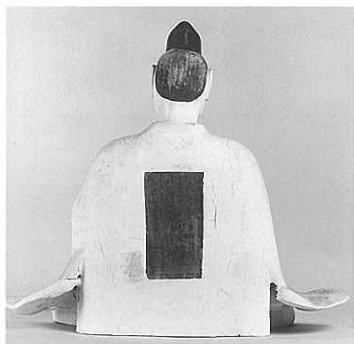
後藤實明像



右側面



左側面



背面



像底



銘（体内）



銘（背中）

披御影本願  
次良左衛門蒙  
御夢想之告  
造立之所也

飛奉刻影御影之事  
後藤伯普守藤原貴明公尊像也  
令安置於芦原之村光明寺者也  
住持一傳叟佛師感定軒 敬白  
天正十六戊子 并後室宗雪  
霜月吉日孝子藤原家均

本願次良左衛門尉

（注1）詳しい構造はつぎのとおり。

頭体部別材。頭部は耳の前で前後に鋸で切断し、内削りをほどこし、玉眼を嵌入してから翳ぎ寄せ、差首とする。体部は肩の内側で横三材を削ぎ、内削りをほどこす。腰のあたりを柵状に削り残している。膝前横一材。両手首先、刀、扇子、左右袖は別材。

（注2）『佐賀県立博物館調査研究書一〇』  
1985年

（注3）『武雄市史』武雄市 1972年

## 行事案内

1月⇨3月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28				

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

カレンダー内、□印は休館日

常設展				展覧会			
観覧料大人200(150) 大学150(100) ※高校生以下は無料、( )内20名以上団体				枠内に明記する以外は無料			
博物館				美術館			
1号展	2号展	3号展	大 展	1号AB展	2号展	3号展	4号展
さがの の化 ほか石 1/22	古 の世 ほか石 1/22	浮 の世 絵 1/22	佐 の の ほか石 1/22	工 の の から 2/5	バスキンとエコール・ド・パリの異邦人たち展 1/5(木)~2/5(日) 佐賀新聞社 大人・大学生1200(1000) 中学生800(600) 小学生500(400) ※( )内は前売・団体料金		
準 備				準 備			
戦国を駆ける武将たち —五州の太守 龍造寺隆信の時代— 2/3(金)~3/12(日) 佐賀県立博物館 大人510(410) 大学生250(150) ※高校生以下は無料				2/11 真一	2/11 日本近代洋画会	第17回さが行動展 2/8(水)~2/12(日)さが行動美術協会 第9回 総合美術ハチロク展 2/15(水)~2/19(日)ハチロク 第39回 佐賀大学教育学部美術・工芸科卒業制作展 2/21(土)~2/28(日)佐賀大学教育学部 渡辺松成書作品展 2/28(土)~3/5(日)佐賀県立佐賀北高等学校 第35回 佐賀大学教育学部美術・工芸科総合展 3/14(土)~3/19(日)佐賀大学教育学部 第17回二紀佐賀支部展 3/21(土)~3/26(日)二紀佐賀支部 第11回佐賀水墨画会展 3/28(土)~4/2(日)佐賀水墨画会	
				3/26	3/26		

## 日誌



百花繚乱の世界 - 江戸化政期の絵画 -  
佐賀県立美術館 10/7~11/13



佐賀県立美術館所蔵品巡回展 秋の美術館  
伊万里市民センター文化ギャラリー 10/14~11/3

佐賀県立博物館・美術館報 第108号

平成7年1月17日

編集発行 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館

〒840 佐賀市内1-15-23 TEL0952・24・3947 FAX0952・25・7006

印刷 日之出印刷